

刑事司法ソーシャルワーカーのジェンダー観に関する質的研究

発表者：松原 弘子（三生会病院・宮城学院女子大学附属人文社会科学研究所）

キーワード：ジェンダー観・司法と福祉の連携・ジェンダー視点に基づく協働

1. 背景

高齢や障害のみならず、社会的な生きづらさゆえに犯罪を繰り返してしまう人々（以下、触法者等）の支援に、社会福祉士等のソーシャルワーク専門職（以下、専門職）が関わる事例が増えている。触法者等及び触法行為の質のジェンダー差に注目し、その影響を適切にアセスメントするには、専門職自身がジェンダーの支援に与える影響を考察できなければならない。しかし、専門職のジェンダー観に注目し、調査した研究は極めて少ない。

2. 目的

本研究は、男性と女性に二分された性別役割分担（以下、ステレオタイプ）やステレオタイプに基づく偏見（以下、バイアス）など、ジェンダーに関連付けられる価値体系を「ジェンダー観」と定義し、個人のジェンダー観は社会のジェンダー観の影響を受け、その影響が支援に現れているという仮説にもとづき、その影響の質を探ることを目的に計画した。

3. 方法

東京社会福祉士会に所属する女性の刑事司法ソーシャルワーカーに、支援においてジェンダーを意識する場面を尋ね、得られたテキストを語りの意味に注目しながらストーリーラインにまとめて、女性社会福祉士のジェンダー観の質を分析・考察した。研究参加は自由意志とし、インタビュー自身を含む個別事例の個人情報分析前に削除すること、研究のいずれの段階であっても自由意志により協力を拒否でき、その場合には聴取したデータをただちに削除することを保証した研究計画を説明し、研究協力に対する同意書を取得した。

4. 結果

1名の非構造化インタビュー、1名の半構造化インタビュー、7名の半構造化グループインタビューで、ジェンダーと支援の関係の語られ方が異なっていた。また、ジェンダーが支援に与える影響は、女性支援より男性支援においてより意識化されていた。グループインタビューでは、参加者の実践経験と個人的な体験の差異が相互の語りに影響し、支援の中のジェンダー観と実践の中のジェンダー構造を共有する相互作用が見出された。

5. 考察

経験を積んだ女性社会福祉士は、ジェンダー観が支援に影響を与えていることを理解しているが、その影響をどのように意識し、解釈するかは、支援者の生育歴や家族歴、支援経験などの違いから個人差が大きいことが示唆された。専門職のジェンダー観は専門性に基づく倫理・価値と一体化され、支援において明確に意識化されていくが、その意識化を試みる場合には、個人よりグループによるスーパービジョンが有効だと推測された。

※本研究は科学研究費助成事業 18K13001 の研究成果の一部である。